
バカと色付き眼鏡と召喚獣

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと色付き眼鏡と召喚獣

【ISBNコード】

N8304X

【作者名】

松竹梅

【あらすじ】

文月学園に通うサングラスをかけた主人公、鈴風松也。すずかぜ しょうや観察処分者の吉井明久とは幼稚園からの姫路瑞希とは小学校からの幼なじみであり、姫路瑞希とは一年生の春休みから恋人同士となつた。これはそんな彼と仲間達の青春学園コメディである。

第一話（前書き）

はじめまして、作者の松竹梅です。

小説を書くのははじめてですが、暖かく見守つて下さい。

第一話

校舎へと続く坂道。

桜の花が咲き乱れた並木道を

俺は全力で走っていた。

しかも人一人背負つて、

「ハツ！ハツ！、たくつー寝坊するなよ瑞希ー！」

「す、すみませんー今日から新学期だと思つと緊張してしまつて…」

「とにかく急ぐからなー！」

オレ、鈴風松也は幼なじみ兼恋人である、姫路瑞希を背負い坂道を走っていた。

何故背負つているかつて？

彼女は体力がないからだ。

「遅刻だぞ！鈴風！姫路！」

学校に着くと校門のところにひとりの教師がいた。

「おはようございます！西村先生、遅刻してすみません！」

「おはようございます！西村鉄人先生、今日も暑苦しいですね？」

「鈴風？今、名前を鉄人と呼ばなかつたか？それに暑苦しいは余計だ！」

「氣のせいですよ」

「……まあいい。ほら。」

鉄人は二通の封筒をそれぞれに渡した。

「二人とも惜しかつたな…。俺が試験官ならなんとかしたんだが」

「や、気にしないで下さい。あれは私の不注意で…」

「やつだぜ、てつちゃんが落ち込む」となって

「誰がてつちゃんだ！」

まあこい、よし、急げ！RRは始まつてこるやー。

「はこよーこくぞ瑞希ー。」

「は、はい失礼します！」

こうして二人は急いで教室に向かつた。

「今更だがなんでアイツは姫路を背負つたままだつたんだ？」

一人は玄関に着いてからそのことに気がつき、姫路は顔を真っ赤にしていたが、松也は気にすることなく姫路を連れて教室へと向かつた。

第一話（後書き）

初めっから、やつひやつあつました。

勢いで書きましたが、このあとどうしようか…

感想待つてます！

第一話（前書き）

更新が遅れてしまつた…

たぶん、不定期更新になるのによろしく

第一話

オレと瑞希は教室の前まで来たのだが、

「おこ、瑞希。本当に元気か？」

田の前にさ、廃屋と言つても差し支えないモノがあった

「と、とにかく入ってみませんか？」

姫路の反応があれはないが入ることにした

「「すみません。遅れました」」

『『『』...ん?』』』』

クラスの奴らは俺と瑞希が入ってきて驚いていた。

いや、『オレと瑞希』にではなく、『瑞希』にだれ。

なんせ、瑞希は学年一位の才女なのだ。

「一度良かったです。今、自己紹介をしているところなので姫路さんと鈴風くんお願いします」

「はい、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『はい、質問です』

「は、はい、なんでショウガ?」

『なんで!』『いるんですね?』

聞きよつよつとはかなり失礼な質問だが

まあ、しょうがないだろ?

「や、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまって…

…」

『 』 ああ～ 』 』

なんか全員（一部をのぞいて）納得していた

『 そついえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『 ああ、化学だろ？ あれは難しかつたな』

『 俺は弟が事故に遭つたと聞いて』

『 黙れ1人っ子』

『 前の番、彼女が寝かせてくれなくて』

『 』 』 』 異端者だ！ 』 』

『 すみません！調子こきました！』

……予想以上のバカ共だ…

「 次に鈴風くんお願いします」

福原先生がオレに呼び掛けた

（次はオレか、ここは一発やつとくか）

「えへ、鈴風松也です。一つ言つと申しますが姫路瑞希はオレの彼女で…

『『『異端者だ…』』』

カチャ（サングラスをはずす音）

ギロッ…（男子生徒を睨む）

…もし手を出したら命の保障はありません。

…分かりましたか？

『『『イ、イエス サー！』』』

カチャ（サングラスをかける音）

（これでいいだろ）

「「「これから一年よろしくお願ひします」」

「よいしゃべ～」

交際宣言を聞いて姫路は顔を赤くして後ろの席に向かい、松也もそのまま後ろに向かった

第一話（後書き）

主人公、一睨みでクラスメイトを黙らせるwwwwww
いつまで効くのやら……

第三話

後ろの席に向かうと見知った顔があった

「 めつ明久、おはよ！」

「 おはよー、松也に瑞希ちゃん」

「 明久くんおはよーいざれこます」

この男子生徒は吉井明久といい、オレと姫路の幼なじみであり
この学年をつてのバカだ

……前までは

「二人とも残念だったね」

「お前にも遅刻しなければ、もつちゅつと上のクラス狙えただろう
にな」

「あはは、こりこりあつてね」

ちなみに、後から明久から聞いた話だと

道端にうずくまっていた女子を見つけ急いで病院まで運んでいき、

学校に向かつたが遅刻してしまったとか、

それを聞いた西村先生や学年主任の高橋先生などが再試験ができる
よう掛け合っていたが、

教頭などが『これは校則である』といいつつで、結局再試験を受け
れずにFクラスとなつたわけだ。

「おいおい、明久がFクラス以外で行けるクラスなんてあるのか？」

明久と会話をしているとゴリラが話しかけてきた。

「誰がゴリラだ！」

「雄一、何叫んでるの？」

「ゴリラもとい坂本雄一がいきなり叫んだことに明久は不思議そうな

顔をしていた

「なんだ雄一知らないのか?」この二学期になつてから瑞希とオレで勉強を教えて、今はDクラス上位くらいの成績はあるぞ?」

「全く、嘘はほどほどにしないよ」「いや、ほんとなんだけどな……」

「やっぱり信じもらえないか……」

「あはは……」

松也が明久の成績が上がっていることを告げても雄一は信じてなく、明久は溜息をはき、姫路は苦笑いをしていた。

パンパン!

「はいはい。その人たち、静かにしてください」

「あ、すみま

バキイツ！ パラパラパラ……

せん？」

「え～。代えを持つてきますので、少し待っていてください」

氣まずそうに先生は教室から出ていった。

10

■ ■ ■ ■ ■

一九四

「おー、や『雄一、ちよつといい?』…………」

松也が雄一を呼ぼおとしたところ、明久に先に言われてしまつた

「なんだ明久？」

「ちょっと話があつてね。廊下の方で話そう。松也も来てくれる?」

「ああ、いいぞ」

明久達は廊下の方で話することにした

「…………私はどうしたらいいんでしょう？」

おいで行かれた姫路は、一人寂しく待つこととなつた

第三話（後書き）

明久の成績が上がっているwww

成績は上がったが大丈夫だろうか？

第四話（前書き）

連続投稿です！

それではどうぞ。

第四話

「それで話つてなんだ？」

「Iの教室のことだけど」

「Fクラスか？想像以上に酷い所だな」

「Aクラスは見た？」

「まだだが……」

「ああ凄かつたな。あんな教室は見たことないな」

オレが見ていないないと云うと雄一が見たときの凄さを語つた。

「そんなんにか？」

「個人でヒヤコンや冷蔵庫が使えて、座席はリクライニングシートだぞ？」

「…………」

あまりの凄さに何も言えなくなつた

「そこで僕からの提案、『試合戦争』をやってみない?」

「戦争だと?」

「うん!しかも△クラス相手に」

「・・・何が目的だ?」

「いや、えーと、

「嘘を言つな」

「正直に話せ」

あまりに酷い設備だからって、なんで、先にそんなこと言つの?」

「勉強に興味がないお前に設備なんて関係ないだろ」

「それにお前は『試験校だから』その学費の『安さ』に惹かれたんじやなかつたか?」

「あーえーっとそれはその・・・」

雄一とオレが追求すると明久は戸惑い始めた

「瑞希のためなんだ?」

「う、うん、そりなんだ」

「まあ、オレも雄一に頼もうとしていたしな」

「気にするな。俺もAクラス相手に試召戦争をやめないと想っていたところだ」

「え？ 雄一も？」

「何でお前が試召戦争をやめると思つたんだ？」

「世の中、学力が全てじゃないって証明をしてみたくてな。

それにAクラスのための秘策も思いついた

そういうと雄一は教室に入つて行つたので松也と明久も教室に入つた。

「坂本君、キミが自己紹介の最後の一人です」

「了解」

雄一君は先生に呼ばれて席を立ち、ゆっくりと教壇に向かっていった

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも、好きなように呼んでくれ

「じゃあ、コリカ」

「誰がコリカだ！」

「じゃあ、ビックフット」

「誰がUMAだ！」

「じゃあ……」

「待て！」れ以上何を言つべきだ！「なかなかいいシッコリだ！」

「…………それで、皆に一つ聞きたい

不満はないか？」

『…………大ありじゃあつ…………』

魂の叫びだつた

「だいひつ？ 僕だつて不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄一が同意すると、あちこちから不満の声があがり始めた

『いろいろ学費が安いからつて、この設備はあまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『やうだやうだ！』

『理不眞だ！』

「みんなの意見はもつともだ。それで、これは代表としての提案なんだが

自信たっぷりの野生味溢れる笑顔で言った。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思
う」

第四話（後書き）

ついに、遂に、戦争をしかけます！

楽しみにしてください

第五話

雄一の、こきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は非難し始めた

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備が落とされてたまるか！』

『姫路さんが居たら何もいらない！』

（誰だ瑞希にラブコールを送ったのは？……ぶつ飛ばしてやる……
いや、それ以上の……）

松也が黒いオーラを出し始める

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まってるじゃん』

『さう言われても何の根拠もないしな』

「根拠なうあるべ。」

このクラスには勝つ」とのできる要素が揃っている

雄一は自信ありげにそう宣言した

「それを今から証明してやる！』

おい康太、今まで姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い

「…………！」

そういうと康太と呼ばれた青年は素早く立ち上がり首を横に振った

「はわあ！？」

姫路は見られていた事に顔を朱くし、スカートを押さえた

「土屋康太　こいつがあの有名な寡黙なる性職者だ」

そういうと康太は首を横に振った

『馬鹿な…………奴がそうだといつか？』

『だが見ろーまだ証拠を隠そうとしているが……』

『ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ』

ムツツリーニとは、男子から恐怖と畏敬を女子からは軽蔑をもつて
言われている名だ

(瑞希のスカートを覗くとはな……後でO S H I O K I が必
要だな)

「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

「え? 私ですか?」

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『そりだ! 僕達には姫路さんがない!』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない!』

『姫路さんさえいれば何もいらぬ(ドンッ!) ゲホオ! ?』

いい加減腹が立ってきたので、殴り飛ばしといった

「それに木下秀吉だつている」

「ワシもか?」

『演劇部のホープだったか?』

『確かにAクラスに木下優子っていう姉がいたな』

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞ』

『これいけるんじゃないか!?』

教室のやる気が高まっていく

「それに吉井明久だつている」

一気に静まりかえった。

『誰だ吉井明久って』

『そんな奴このクラスにいたか?』

「おい雄一! 何でそこで僕の名前をだしの! ? せつかく上がった士氣が台無じじゃない! だいたい僕は普通の人なんだから普通の扱いをしてよ! 」

明久が文句を言つと、雄一が睨み付けてきた。

「さうか、知らないのなら教えてやる。

『いつの肩書きは『観察処分者』だ! !』

『それって、バカの代名詞じゃなかつたか?』

『確かに真のバカに『えられる称号』だつたハズだな』

「みんなひどいよ! 」

明久はクラスメイトからの言葉に泣いていた

「あのー、観察処分者って何ですか?」

「瑞希、それは後で教えてやるよ。雄一、続けてくれ」

「ああ、とにかくだ！俺達の力の証明するためにまずロクロクラスを制圧しようと思つ。皆この境遇に大いに不満だひつ～」

『『『『『『当然だ……』』』』』』

「なら全員^{パン}筆を執れ……出陣の準備だ！」

『『『『『『おお――――――シ――』』』』』』

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステム^{テス}クだ！！」

『『『『『『おお――――――シ――』』』』』』

「おッおー／＼／＼

姫路は恥ずかしそうに腕を振り上げていた。

可愛い／＼

かくして、試召戦争の幕があがつた

第五話（後書き）

いよいよ試合戦争がはじまります！

戦闘シーン、上手く書けるかどうか……

余話／キャラ紹介／（前書き）

遅くなりましたが主人公の紹介です

新しいことが判り次第、随時更新します

11月10日 更新

余話／キャラ紹介／

名前：鈴風 松也

読み：すずかぜ しょうや

容姿：身長は雄一より少し低めで、黒髪にツンツンした感じの髪型、（禁書の土御門を黒髪にした感じ）瞳は金色。

クラス：F

趣味：サングラス集め・料理・ゲームや漫画

好きなもの（こと）：瑞希・母親・弟妹・明久・努力する人間

嫌いなもの（こと）：瑞希、母親、弟妹、明久を傷つける人間・努力する人間をバカにする人間

備考：いつもサングラスを掛けているが、外すとヤクザ顔負けの目つきをしている。

なので中学時代は、不良に絡まれ、子供には泣かれと散々なこととなり、明久の勧めでサングラスを掛けるようになった。家族構成：母親・自分・弟・妹の構成

成績：Bクラス上位くらいだが、振り分け試験の時に体調を崩した姫路を保健室に連れて行くため無得点扱いとなる

召喚獣：見た目は松也をデフォした形で破戒僧の姿。武器は錫杖で

ある

腕輪・後のお楽しみ！

余話／キャラ紹介／（後書き）

設定を考えるのも骨が折れるな…

第六話（前書き）

都合により、ロクラス戦の件は省略します

では、どうぞ。

第六話

「明久、宣戦布告してきたんだな」

あの後、明久が宣戦布告の使者となり、心配になつたため一緒に行くことにした

案の定、下位勢力の使者に暴力を振るつといつ噂は本当に襲いかかってきたが、

サングラスを外し睨みつけると、大半の生徒が怯んだので、その隙に逃げてきた

「一応、今日の午後に開戦予定と告げてきたけど

「じゃあ先にお昼飯だな? ほら明久、今日のだ

「ありがとう! 松也」

「? 吉井のお弁当つて鈴風が作ってるのね?」

島田は驚いたように松也に尋ねた。

「いや、これはお袋が作ったもんだが？」

「菊さんの料理はいつもおいしいね！」

「ふ〜ん、そうなの」

「ああ大体、去年の明久の食事は随分と酷かつたからな～」

島田が適当に相づちを打った後、去年の明久の食事環境は酷かつた
といった

「いや……一応食べてたよ」

「あれは食べると言えるのかの？」

「……お前の主食って水と塩だったりう？」

「失礼な！－きちんと砂糖も食べてたよー！」

「それは食べるとは言わんぞ明久」

「…………正確には舐めるが正解」

「まあ、飯代を遊びに使い込んだお前が悪かったからな…………」

「しつ仕送りが少なかつたんだ！」

「趣味にお金かけ過ぎるからだ……」

「ところで雄一よ。一つ氣になつたんじゃが、どうしてAでもEでもなくDクラスなんじゃ？」弁当を食べて一休みした後に秀吉が今後の試合戦争のことをついて聞いてきた

「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。

姫路に問題のない今、正面からやりあつてもEクラスには勝てる。Aクラスが田標である以上、Eクラスなんかと戦つても意味がないつてことだ

「? それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から田標のAクラスに挑もうよ

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ？」

それに、さつき言った打倒Aクラスの作戦における必要な布石だし
な」

「あ、あの~」

「ん? どうした姫路」

「えつと、その。さつき言いかけたって

……松也くんと明久くんと坂本くんは、

前から試合戦争について話し合ってたんですか?」

「ああ、それか。 それはつこさつき、姫路の為にこつて松也と明久
に相談されて」

「それはそうと...」

「さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ

明久タイミングが悪いぞ。別にバレてもいいんじゃないかな?」

「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる

・・・・・いいか、お前ら。

ウチのクラスは 最強だ」

「良いわね。面白そうじゃないー。」

「そうじやな。△クラスの連中を引きずり降ろしてやりつかの」

「…………（グッ）」

「が、頑張ります。し、松也くんもがんばりましょー。」

「ああー当然だ！」

「頑張るつね！松也に瑞希ちゃん」

「そりゃ。それじゃ、作戦を説明しようつ

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた

第六話（後書き）

姫路の弁当の話がない！？

一体、どうなつていくんだか…

第七話

「先生！ 採点お願ひします！」

「ハハちもお願ひします！」

「僕もお願ひします！」

昼休みも過ぎて、いよいよロクラス戦が始まつたが、松也と姫路と明久は振り分け試験を受けていないため無得点扱いとなつている

「松也と瑞希ちゃんは相変わらず速いよね」

「明久もすいぶん速くなつたじゃないか？」

「ハハ？ なら、うれしいなあ

明久は松也と姫路の解答の速さを見て賞賛していたが、明久も去年よりも解答する速さが上がつていて、明久は嬉しがつていた

「ですけど、本当にロクラスに勝てるんですか？」

「あの雄一が勝算もなしに戦争を仕掛けないだろハハ？」

「で、ですけど……」「まあ、オレ達はあいつを信じて先ずはテス

トを終わりせといへぜ

「うん、 そうだね」

Dクラスに勝てるか不安になつていて姫路を松也が落ち着かせ、 テストは続いていった

ピンポンパンボーン！

しばらくテストをしていると放送を告げるチャイムが鳴った

『船越先生、 船越先生』

「「」の声は須川くん？」

「雄一の作戦じゃないのか？」

オレと明久が不思議に思つ間も放送が続していく

『吉井明久が体育館裏で待っています』

「え？」

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそ�です』

「須川ああああああ！」

『吉井君、テスト中なので静かにして下さい』

明久の怒りの叫びが響いた

無理もない、船越女史は婚期を逃して焦りに焦つた挙げ句、単位を盾に生徒に交際を迫るといふこの学園で一、二を争う危険な先生なのだ

『おい、聞いたか今の放送！』

『ああ。Fクラスの連中本氣で勝ちに来てるぞー。』

『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……？』

遠くの方からFクラスの奴らが動搖する声が聞こえてきた

『皆、吉井の死を無駄にするなー。』

『絶対に勝つぞー！』

『吉井、骨は拾つてやるからなー。』

Fクラスの奴らの士気がうなぎ上りのようだ

その前にまだ、明久は死んでないんだがな

テストも受け終わり、

オレ達は雄一の所に来ていた

「シャアアアアツ！」

雄一を目に捉えると同時に明久は襲いかかっていった

「お、船越先生」

……凄いな。

雄一が言つた瞬間に明久が掃除用具のロッカーに入つて行った

「さて、バカは放つておいて、そろそろ決着をつけにいくぞ！」

『おオ~~~~~！！』

いよいよDクラス戦も終わりに近づいてきた

ちなみに、ロッカーで怯えている明久をなんとか落ち着かせ、松也、姫路と共に戦場へと向かった

第七話（後書き）

なかなか物語が進みません…

第八話（前書き）

黒炉様

感想ありがとうございます

第八話

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

雄一の声が響く、ピュアラゲリラ戦に持ち込むようだ

『そっちから、周り込め！ 僕はこいつに数学勝負を申し込む！』

『なら、俺は古典勝負を！』

『よし、日本史で！』

Dクラスの連中を取り囲み、Fクラスのメンバーが次々に倒していく
『Dクラス塙本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声が響き、ますます士気があがっていく

『援護に来た！みんな、もう大丈夫だ！ 落ち着いて取り囲まれないよう周囲を見て動け！』

よく響く声が聞こえた

Dクラス代表の平賀である

『Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！』

いよいよ初の戦闘の始まりだ

「準備はいいな、明久？」

「もちろんだよー！」

そう言つと明久とオレは戦場へと飛び出した。

「Fクラス撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

『逃がすな！個人戦ならそつは負けない！追いつめるんだ！』

雄一の退却命令にFクラス一同は下がり始めた

『本隊の半分はFクラス代表の坂本を追え！残りは包囲されてい
る者を救出だ！』

平賀の号令の下、あつというまに雄一を中心としたFクラス本隊はDクラスメンバーに囮まれてしまった

だがそのためにロクラス本隊に隙が出来てしまった

「いくぞ明久！」

「わかつたよ松也！」

「「Fクラス 鈴風松也・吉井明久が近衛隊の六人に日本史で勝負を申し込む！」」

『え！？』

「「試験召喚！」」

『し、試験召喚！』

明久の召喚獣は改造学ランに木刀という不良のような姿を

松也は、法衣を着て数珠を首からさげた姿は僧侶の様に見えるがボサボサな髪とサングラスが相まって、まるで破戒僧のような姿の召喚獣だ

そのまま後に点数が表示された

『Fクラス 鈴風松也 吉井明久 日本史 316点 159点

VS

Dクラス 近衛隊X6 平均94点』

『なんだあの点数！？』

『本当にFクラスか！？』

「よそ見してる暇は……」

「ない！」

Dクラス生徒が驚いている隙に松也達は襲いかかった

『ちくしょー！なんであたんねんだ！？』

『とにかく代表はいつたん下がつてて！』

なかなか攻撃が当たらないことに焦りを感じたのか徐々に後退し始めた

だが、前に集中するあまりに後ろから来る少女に気づいていないようだ

『あ、あの…』

少し離れたところで、平賀の後ろから、申し訳無れりと姫路が声をかけていた

『え？姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らないし、今は戦争中なんで…』

『は、はい、それでですね…』

未だに現状を把握出来てない平賀と、もじもじと言いつつ姫路はいった

『え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願ひします』

『あ、こちらこそ』

(おー、敵に挨拶してどうするんだ瑞希！…)

『その……Dクラス代表の平賀君に現代国語勝負を申し込みます』

『はあ…、どうも』

『あの、えつと…… や、試験召喚ですー。』

『え？ あ、あれ？』

平賀は今更気付いたようだがもつ遅い

『現代国語 Fクラス 姫路瑞希 349点

VS

Dクラス 平賀源一 129点』

『「じ、じめんなさい」』

姫路は大剣を軽々と振り回し、平賀の召喚獣をあっさり斬り捨ててしまつた

いつしてFクラス対Dクラスの試験戦争は終了した

第八話（後書き）

甘甘なシーンなんて書けるんだろうか…………？

アドバイスなどあつたら教えて下さい

第九話（前書き）

前書きはなにをかいたらいいんだろうか？

第九話

Fクラス勝利といつ知らせにFクラス生徒は歓声を口クラス生徒は悲鳴をあげていた

「ま、まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

平賀は信じられないといつ顔で膝をついていた

そんな平賀をクラスメイト達は慰めていた

「あ、その、やつをはすみません……」

違つ方向から瑞希ちゃんも駆け寄つて謝る

「いや、謝ることはない。全てFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。まあ、吉井君の成績が上がつていたのは驚いたが……

ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか坂本?」

「いや、その必要はない」

平賀は今後の設備移動について聞いたが、雄一は断つた

「え？ なぜだ？」

「Dクラスの設備を奪う気はない、俺達の目標はあくまでもAクラスだ」

打倒Aクラス。これがオレ達の目標すものだ

「それは有り難いが……。それでいいのか？」

「勿論、条件がある」

「……一応聞かせて貰おつか

「何、そんなに大した事じゃない。俺が指示をだしたら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

「雄一が指したのはDクラスの窓の外にある室外機。但し、それはDクラスの物ではなく、Bクラスのものだ

「Bクラスの室外機か？」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性はあるだろうが、そう悪い取引じゃないだろ？」「

「それは此方としては願つてもない提案だが、何故そんな事を?」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。では此方は有り難くその提案を呑ませて貰おう

「タイミングについては後口詳しく話す。今日はもひ帰つて良いぞ」

「ああ。有り難う。お前らがAクラスに勝てるよう願つていろよ」

「ははっ。無理するなよ。勝てつこないと思つていいだろ?」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるかどうか…まあ、応援するよ」

じゃあ、と手を挙げてロクラス代表、平賀源一は去つていった

「それじゃあ僕たちも帰ろうか

「そうですね

戦後対談も終わり、松也達は帰りの準備をしていた

「悪い、この後用事があるから先に行つてくれ」

「用事？なにがあつたの？」

明久はどうやら忘れているようだ

「船越先生を説得しに行くんだよ」

「ー！？…………（ガタガタツブルブルツ）」

「あ、明久くんしっかりして下さい！大丈夫ですから。ね？」

思い出したようで顔を青ざめ、体を震わせる明久。それを姫路が落ち着かせていた

「あとのことは俺に任せてくれ。瑞希のこと頼んだぞっ！」

「…………うん、そうするよ。

……松也、無事に帰つてきてね

「ああ、だつて俺…」

帰つたらお袋の手料理を食べるんだから…」

「やめて…そんなフラグたてないで…つて行つちやつた…」

果たして松也の運命は…

第九話（後書き）

まさかの死亡フラグ！

はたしてどうなるんだ！

第十話（前書き）

更新が遅れました

どうぞ

第十話

（明久 s.i.d.e.s）

「おはよひ瑞希ちゃん」

次の日、学校に向かっていると瑞希ちゃんが先を歩いてたんで声をかけた

「あ、明久くん、おはよひじゃらこます…」

?なんか落ち込んでるみたいだな

ん?そりゃええ、松也が見当たらない…

井、

まさか……

「松也に何かあつたの…？」

「はい実は今朝、松也くんのお家に行つたのですが……

お、お義母さん／＼の話では昨日、ボロボロになつて帰つてきたからもう少し寝かせておくと言つてました／＼

今は回復試験が一段落ついて昼休みである

「…………（チーン）」

{ side out }

「ひつじて僕たちは学校に向かった

「それじゃあ、松也は後から来るんだね？なら、僕たちは先に行こうか」

「はい、そうですね。」

無事に帰つてこれたんだね……

ちなみに松也の母親と瑞希ちゃんの両親は一人の交際を認めており、家族公認というわけだ

松也……

松也は昨日の疲れもあつてか、机の上に倒れていた

「松也、昼休みだよ」

「…………」

「よし、昼飯でも食いに行くぞー。今日はラーメンとカツ丼とカレーと炒飯にすつかな?」

「どんだけ食う気だよ……まあ、オレも弁当忘れたし一緒に行くか」

「それじゃあ僕も」

「あ、あの」

ゾワッ!!

雄一が学食に行こうとするところのメンバーも一緒にいくことに

その瞬間、明久と松也は背中に妙な寒気を感じた

「なんじや、姫路よ?」

「え、えっと。お皿なんですか? 私のを食べませんか……」

「もしかして弁当か?」

「はッはい、迷惑じゃなかつたらいいわー。」

「迷惑なもんか! なあ、明久に松也……って何震えてるんだ?」

「な、なんでもないよな! 松也!」

「あ、ああ、そうだよな! 明久!」

「おぬしらのその姿を見ても全く説得力がないのじやが……」

明久と松也は顔を青ざめ、体を震わせており、見てる方は不思議がつっていた

「せっかくの」駆走じゅし、こんな教室ではなく屋上にでも行くかのう

「だ、だつたらお前ら先に行つてくれ」

「ん? 松也はどうか行くのか?」

「の、飲み物でも買つてくる。ぜ、全員お茶で良じよな?」

「ああ、良いぞ」

「なら僕も行くよ！－ひ、一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「せーちゃんとお前たちの分はひとつおくれる」

「「お、おかまいなへーー。」

こうして明久と松也はお茶を買いに、姫路達は屋上へと向かつた

「福井ちゃんのお弁当、美味しいくなつたのにね……」

「ああ、そうだな。美味しいはなつたが、まだまだ慣れんな……」「

「そうだね……」

実は中学時代に姫路の弁当を松也が食べたのだが、食べた瞬間に意識を失った

次に目を覚ましたのは、その日から三日後のことだった

姫路の料理が原因だと聞いた松也の母親が、試しに料理の”さしす
せそ”を聞いたところ

答えはすべて薬品の名前だつた

それで早速、姫路の料理を直そつと明久も加えて料理教室を開いたが

結果は惨憺たるものだった

松也の母親は某プロボクサーの様な格好で燃え尽きており、明久と
松也はそれから一週間寝込んでしまった

だが、苦労の末になんとか直すことができた

ある『欠点』を残しては……

屋上に着くとみんな楽しそうに姫路の料理を食べていた

「おひへ、お前ら遅かつたな」

「あなた達のはじゅあんとあるからね」

「「ありがとひへ…」」

「姫さん、『ザーターもあるんですよ』

「『ザーターもか…』

「それはありがたいのじゃ」

「……………」あわてつになれる

姫路はカバンからゼリーの入ったカップを取り出し、四人に渡した
だが、ここで明久と松也は驚いたような顔をした

「瑞希……………」これは前に作ったことあるか?

「いいえ、初めてです」

初めてです

……はじめてです

……ハジメテデス

「全員、今持っているモノを下に置くんだ……」

「は、早くみんな下に置いて…でないと大変なこと…?」

姫路の言葉を聞いた途端、一人は大声を出した

「何そんなんに慌ててるんだ？」

「…………まさか、独り占めにする気か」

「そりはいかないわよ」

「そんなんにうまいのかの？」

みんなは止めているのはゼリーを独り占めにしたいのだと勘違いしてこるようだ

「じゃあ、お先に（パクッ）」

「……（パクッ）」

「ああー…ゆ、雄一ー！」

「ムツシコーーー！」

「だから、何よさつきから慌て

バタン×2

ガタガタツ×2

て…つて、え?」

倒れた音のした方を見ると体を小刻みに震わせて口から泡を吐いて
いる

雄二とムツツリーの姿があつた

「ゆ、雄二!しつかりして!」

「ムツツリー!大丈夫か!とにかく島田!下の購買に行ってある
だけお茶を買つてこい!」

「わ、分かつたわ!」

この光景に秀吉はカップを置き震えだし、姫路は何が起つたか分
からないようだ

しばらくの間、屋上は騒がしかつた

（余談）

「そういえば」

「なんだ？」

お茶も買い、屋上に向かっていると明久が松也に話しかけていた

「昨日、船越先生になんて言つて諦めさせたの？」

「ああ、そのことか……」

松也が遠い目をした

「最初に体育館裏に行つた時『別の名前を出したのは恥ずかしかったからね！』なんて言つて襲いかかれてな……」

そのままリアル鬼ごっこをしたんだが、何とか落ち着かせて、今度いい生徒を紹介するつてことで退いてくれたよ……」

「松也…………ありがとー！」

明久は英雄に向かつて心から礼を言った

第十話（後書き）

姫路の料理はやはり！！

はたして、その真相は！！

第十一話（前書き）

遂に姫路の料理が明らかに！！

第十一話

「二人とも大丈夫か?」

「ああ、なんとかな」

「…………死ぬかと思った…」

あの後、必至の救急処置によりなんとか一人は助かった

「あれはいつたい……」

島田は未だに何が起こったか分からぬようだ

「瑞希ちゃんは最初、料理ができなかつたんだ」

「なんだ不味かつたのか?」

「黒こげの方がまだマシだ。瑞希は何故か薬品を入れてくる

「や、薬品だと…?」

この発言に一同は再度、顔を青ざめた

「ねえと明久のおかげで食えるへりこはなつたんだが、

”あんといいの”だけは未だに直らないんだよな

「なんだ? あんといいの?」

「瑞希ひやさはね、何故か初めて料理するモノに限って調味料を使つ
んだ」

「ああ、しかもある程度教えたモノじゃないといはね続くしな……
ちなみに毎回、注意してはいるが、田を離すとすぐに入れよつとす
るんだ」

「本題にすみません……」

「…………

「い、怖こわね瑞希は……」

「…………恐ひじー

「次からぬを付けるよつあるかの……」

みんな今後は用心深くなるだろつ

「それよつや。次の作戦を語りつ

「そうだな」

「ところで、雄一よ、次はBクラスなのかの？」

「ああそうだ」

「……………田標はAクラスでは？」

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

雄一らしくもない降伏宣言

まあ、いつのクラスを見るとそうなるな

「それじゃあ、ウチらの最終田標はBクラスに立派なって事？」

「いや、そんな事はない。Aクラスをやる

「それってどういってですか？」

「クラス単位では勝てないと思つ。だから一騎討ちに持ち込むつと思つ」

「一騎討ちで決まりつけたつ？」

「Bクラスを使う。」

下位クラスが負けたらどうなるか明久、知っているな？」

「えー？ エーと……」

そこに姫路が明久にどうなるか説明していた

「つまりはBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「逆に上位クラスが負けたら設備が入れ替わるんだぞ？」

「覚えておけよ明久」

「うん、わかった」

「交渉内容については考えてある。俺に任せてくれ」

「じゃがな、それでも問題はあるじゃろう。そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？」

「そうだね。瑞希ちゃんがいることは既に知られているだろ？ し」

「それに関しても考えがある、心配するな。とにかくBクラスをやるぞ！ 細かいことはその後だ」

『了解』

「よし、明久」

「？」

「今日のテストが終わったらBクラスに行って宣戦布告して来る。時間は明日の正午からだ」

「ヤダよ！ 雄一が行けばいいじゃないか？」

「いいから行つてこい。大丈夫だ……半分は」

「半分つて何！？」

「明久、俺も行つてやるよ。確認しどきたいことがあるからな……」

「確認？なんかあるのか？」

「なうに、ちょっと見かけただけだからな、確認が取れたら知らせるわ」

「ああ、分かった」

こうして、昼休みは終わった

第十一話（後書き）

次回からいよいよBクラス戦です

第十一話（前書き）

いよいよBクラス戦開始！

第十一話

次の日の午後

「さて皆、総合科目テスト」苦勞だった。」

教壇に立ち、雄一が机に手を置いて皆の方を向いた

「午後からはBクラスとの試験戦争に突入する予定だが、やる気は十分か？」

『おお――――――!』

「さて今回は姫路に前線に出てもいい、

姫路、しつかり頼むぞ」

「が、頑張ります！」

『『『『『 いよっしゃあ――――――!』』』』』

『キーンー・ゴーンー・カーンー・ゴーンー』

そこでチャイムが鳴り響いた

「野郎共、きつちり死んで来い！」

ミヅチノシテ

「行つてこい！！目指すはシステムデスクだ！！」

『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

みんな教室から出て行つた

「瑞希がんばって来いよー！」

「あれ？ 松也くんはどうするんですか？」

「俺は教室で待機だからな」

「そ、うなんですか……」

松也が前線に行かないと聞き、姫路は落ち込みだした

ポンツ

「？」

ナデナデ

「大丈夫だ、もし瑞希がピンチになつたらすぐに行くからな
だから落ち込むなよ」

「……はいーがんばってきます！」

松也に頭を撫でてもらつたためか、満面の笑顔で姫路は戦線へと向
かつた

「さて、これからのことでも考えるか？雄一」

「そうだな：Bクラスの代表が、”あの”根本ならな

根本恭二

悪い噂しか聞かない奴だ、今回は警戒してあえて教室に残る事にした

「…………何も起きないよな？……」

『失礼するぞ』

しばらく経つと誰かが現れた

俺は後ろの方におり、雄一が話し始めた

『誰だ?』

『Bクラスの使者で来た』

『使者だと?』

『ウチの代表が一時停戦協定を結びたいそุด』

『……停戦協定か……分かった、応じよつ』

『分かった、俺たちは視聴覚室にいるからな』

『ああ、後から行くと伝えとけ』

Bクラス生徒は戻つていった

「雄一、なんで停戦なんて結ぶんだ？」

「姫路の体力を考えると明日に持ち越した方が都合がいいからな」

「なるほどな」

「それでだ、お前は一緒に来るか?」

「いや、俺は一応教室に残る。行つてる間に教室で待ち伏せされる
つて可能性もあるからな」

「そうだな……それじゃあ行つてくれるわ」

「ああ、気を付けるよ」

「お前もな」

雄一は数人連れて視聴覚室に向かつた

『本当に大丈夫なんだろうな?』

『根本のことだ。大丈夫だる』

『そうだな』

雄一達が教室から出て、しばらくすると数名の生徒が入って来た
松也は見つからないように掃除用具のロッカーに隠れている

『さつさと済ませようぜー』

バキッ！ バンッ！

そして、その内の一人が一台のちゃぶ台を壊すと同時に松也がロッカーから出てきた

『『ーー』』

「見たぞ、見たぞ、えうと、ひい…ふう…みい…全部で5人か」

『な、なんで人がいるんだよー』

『知るか！それより先生に知らされたらやばいぞー』

『そうだな……恨みはねえが大人しくしてもうつー』

そう言つて一人が殴りかかつてきた

「はい正当防衛、成立……つと！」

『ガハツ！』

松也はカウンターで逆に殴り飛ばした

「どうした？この程度か？」

『この野郎！…』

『なめやがつて！…』

二人ほど怒りを露わにさせながら、松也に殴りかかるうとしたとき

「貴様等そこで何をやつてゐる！…」

『『げ、鉄人！…？』』

『…………ちょうどいい』

西村教諭が教室に入ってきた

「鈴風、これせどりゅうじとだ?」

「どうゆうじとつて、そこそこいる奴等が『』の設備を壊すのを見つけたんですが、

いきなり襲いかかってきたんですよ?」

「ほ〜、そいつが貴様等?」

西村教諭は振り向き、Bクラス生徒に尋ねた

『い、言い掛かりです!』

『確かに俺たちはここに入つたが、それは戦争しているからだ!』

『なのに、そいつがいきなり殴りかかってきたんですよ!』

『と、向ひうは言つているが?』

西村教諭は再度こちらを向いて尋ねた

確かにこちらは一人、あちらは複数、証言の数でこちらが負けていく

現に自分達が有利と知つてか、西村教諭の後ろでイヤな笑みを浮かべている

が、

こちらには切り札がある

「ちよつと待つてくださいよ」

『 』『 』『 ～～ 』『 』『 』

松也は教室の窓側の隅へと向かった

そして、そこににあるカバンから

「よつと」

『 』『 』『 ！ ～～ 』『 』『 』

ビデオカメラを取り出した

「これを見てくれますか？」

そこには、先程のやりとりが映し出されていた

「……さて、なにか言い訳はあるか？」

『 ほ、補習はイヤだ！』

『助けてくれ！』

『お母ちゃん！』

「…………これは証拠と校則違反ということで預かるぞ」

「分かりました」

そういうひとクラス生徒を連れて行ってしまった

第十一話（後書き）

もっと、文章力を上げたい
.....

第十二話（前書き）

連日投稿

第十二話

「おう明久に秀吉、戦況はどうだ？」

西村教諭が去つてしまふと明久達が戻ってきた

「なんとか渡り廊下を抑えたよ」

「といひでお主一人でどうしたのじゃ？」

「雄一達は停戦協定を結びにこつて、俺は留守番つてわけだ」

「停戦協定？」

「実はな……（説明中）……といわけだ」

「なるほど（いつ）」

「……お前等何してんだ？」

「さうやから雄一達も戻つてきたよ」

「僕達はBクラスの代表が根本だつて知つて、心配になつて戻つて
きたんだ」

「やつが、まあ松也の報告で知つてはいたがな

「え？ そつなの？」

「じゃから松也は来なかつたのかの？」

「ああ、予想通り嫌がらせで設備を壊そつとしてたが、返り討ちにしておいた」

「やうか、」苦労だつたな

「お構いなく」

その後、しばらく話し合いは続いた

「大変だ！ ！」

「どうしたんだ一体？」

「何があつたのか？」

「島田が人質に捕られた！」 須川

「！」 ちは姫路さんが！」 近藤

『 』 『 』 『 』 なに！？？『 』 『 』

二人の知らせを聞き、教室が騒然となつた

話は数分前にさかのぼる

SIDE 瑞希

なんで松也は来なかつたんでしょうか…

き、きっと大切な作戦があるからです！

そうです。そうに決まっています…

?何か話し声が聞こえますが…何を話してるんでしょうか?

『.....』

『.....おい…れ本当か?』

『ああ間違いない、さっきFクラス教室に突入した奴等から聞いたが、鈴風つてやつが大怪我したらしい』

え!?

松也くんが怪我を!

『それで、そいつどうなったんだ?』

『さあな、確か保健室に行つたはずだがな、それより戦争中だろ?』

『わうだな』

保健室ですね!!!

すぐに行かないと!-!

「あ、あのすみません。ちよつと行つておますー。」

『え！？姫路さん！』

姫路は急いで保健室へと向かつた

後ろから来る影に気づかずには

SIDE OUT

「なんで島田さんと瑞希ちゃんが人質に！？」

「あうだー、どーこーい」とだーー！」

「落ち着けお前等！」

「やつらじゃぞーひとまず訳を聞かなくては話にもならんぞー。」

雄一達に止められて、ようやく明久と松也は落ち着いた

「そうだね……」

「すまん、取り乱して……で、どうこう状況なんだ？須川に近藤

『どうせいつも、いきなり島田が走り出してどこか行ってしまうで
れ……』

『そのすぐ後に、姫路さんも後を追う様に……』

『……………その後に捕まったのか……………』

「とにかく、明久と秀吉は須川ともう一人を連れて島田の方へ、悪いが松也は近藤と一緒に姫路の方を頼む

いいか、できるだけ早く助け出せ……』

『……………了解……』

こつして松也達は戦場へと向かつた

第十三話（後書き）

まさかの姫路が人質に！

果たしてどうなるのか！

第十四話（前書き）

更新が遅れました！

果たして姫路はどうなるのか！

第十四話

『そこで止まれ!』

『それ以上来たら、止めを刺して補修室送りにするぜ!』

「こ」は一階の渡り廊下、松也と近藤は姫路を捕らえて二人と対峙していた

よく見ると姫路の点数は一桁しかなかつた

「松也くん……」

(近藤、頼む)

(分かった)

姫路は両手を捕まれており、目に涙を溜めて松也達を見つめた

「おいおい、人質取つたくらいでいい気になるなよ?」

俺たちは現在開発中のアイコンタクト（鉄人対策のため）をする

『はん！その余裕がいつまで続くかな？』

「お前等が倒れるまで続くが？」

『Fクラスのクセに調子のつてんじゃねーよー。』
『バカ

力チャツ
…………

ギロツ！！

「調子にのつてんのはテーマ等の方だ！！」

『『！？』』

ガタガタツ

ブルブルツ

松也の目を見て、Bクラスの生徒は震え始めた

無理もない……

今の松せば皿の白い部分が充血し……

金色の瞳と合わせて……

それはまるで……

……………悪魔のよつな皿をしてこらのだから

松也はさつきよりも鋭い眼差しで戦闘準備に入つた

「…………さあて、覚悟はできるよな…………」

近藤は姫路を庇うように立つた

「まかせろー！」

「近藤！そのまま瑞希を頼むー！」

松也に気をとられていううちに、背後に回っていた近藤が姫路と姫路の召喚獣を助け出していた

『二つの間にー！』

「おうー、試験召喚！
『なー？』

「近藤、今だー！」

『ひい、た、助けてくれ』

『お、お、お願ひだ』

が、Bクラスの二人は松也に睨まれたことにより既に戦意を失っていた

「…………許す気はねえよ！！」

『『『ぎやああ／＼！…』』』

松也は一人を倒すと何処から現れた西村教諭に任せて、姫路達と一緒に教室へと向かつた

「大丈夫か瑞希？」

松也と姫路は教室に向かつていた

ちなみに近藤には救出成功の知らせを頼み、先に行かせた

「……」

姫路は救出されてから一言も喋らない

「おい、どうしたんだ？」

「松也くん……ごめんなさい」

「？」

そういうと姫路はその場で頭を下げた

「松也くんの……力にな……

なる」とがで……できなくて……それに……

それに、足を引っ張るよつなことを……して……」

「瑞希……」

姫路はその場で泣き始めた

「う」あんなさー……「う」あんなさー……「う」あ

「瑞希」

ギュツ

「ひやあ／＼／＼」

松也が姫路を抱きしめると驚いたような声をあげた

「瑞希、お前が気に病む事じゃないよ」

「で、でも…」

「それに言つたろ？『ピンチになつたら行く』って、だから気にす

二

姫路は目に涙を溜めたまま笑みを浮かべた

「それじゃあ、さっさと教室に戻るか。みんなが待ってるからな」

「はい」

松也と姫路は足早に教室へと向かつた

仲良く手をつないで…

教室に戻り、その光景を見たFFF団は松也に襲いかかつたが、松也により地に沈んだ

第十四話（後書き）

さて、この後どうするか……

第十五話（前書き）

いよいよBクラス戦が終わります

第十五話

「失礼するぞ」

あの後、教室で休憩していたが、ムツツリー二からCクラスの動きが怪しいという知らせを受け、雄一は主要メンバーを連れてCクラスに来ていた

「Cクラス代表はいるか？」

『Cクラス代表は私だけど』

そういうとこクラス代表の小山友香は前に出てきた

「？
あの松也くん？」

「どうしたんだ、瑞希？」

雄一が交渉している間、着いてきた松也達は雑談していると姫路が話しかけてきた

「あそこのかーテンの所に誰かいるように見えるんですけど…」

「…なに？」

姫路の指さす方を見ると確かに誰か隠れているようだ

(誰か隠れてるみたいだが…………！確かにこの代表は！)

『それで何しに来たのかしら?』

「そうだったな、実は…」

(ま か い)

「クラスと不可侵じよ『雄一』……どうしたんだ松也？」

これから不可侵条約を結ぼうとした雄一だったが、松也に呼ばれ不機嫌そうに振り向いた

「雄一、これは罷だ！」

「眠だと、どういふんだ？」

「なあ、そんだる…………根本」

「なに!?

松也はカーテンの方を見るとみんなの目はそこに集まつた

すると、そこから根本とBクラス生徒が十名程出てきた

「前に噂でお前に彼女がいるって聞いてな、確かこの代表がそういうだつたろ?」

『なんだと!』

『彼女持ちだと!』

『異端者だ!』

それを聞き、Fクラス生徒が根本に襲いかかろうとした

「待て、今は停戦中だ!後田、思う存分やつていいぞ!」

『『分かつた』』

一先ず落ち着かせて根本の方を向く

根本達は教室から出ようとしていた

「待て根本」

「チツ、なんだよ」

根本は舌打ちして、口からを向いた

「なに、じつせなり！」決着をつけねえか？」

『『な』ー。』』

両クラスから驚きの声があがる

「おいー。」きなり何を言ひ出すんだ！」

「怒るなよ雄一、ひやんと考えていいのか？」

「ハツハツハツ！Fクラスが勝てると思つてゐるのか？」

バカ

「は？ 勝てるが？」

「なめやがって！」

「やうかい、それじゃあ再戦していいんだな？」

「いこだらつ……呂きのめこへーかー！」

「長谷川先生、停戦協定を無にして再戦してもいいですか？」

『許可します』

「ひして、Bクラス戦が再び始まった

『坂本を狙え！ 雑魚は構'つな！』

開戦すると同時に根本は下がりながら命令を出した

「松也！作戦なんであるの？」

「ああ、とにかく明久以外は下がつてくれ！」

「いくぞ明久！」

「うん！」

「まず、俺が足止めする！」

Fクラス 鈴風松也がBクラス全員に数学で勝負を申し込む

試獣召喚サモン！

『甘く見やがつて！』

『いくぞー試獣召喚サモン！』『』

『』『』『』試獣召喚サモン！』『』

『Fクラス 鈴風松也 数学 411点

V S

Dクラス モブ×10 数学 平均218点』

『な、なんだ！あの点数！』

『本当にFクラスか？』

（あれ？前にも聞いたような…）

『怯むな！相手は一人だけだ！』

『そうだ、一斉にかかる！』

Bクラス全員が襲いかかってきた

「さて……腕輪発動！」

松也がそういうと松也の召喚獣がサングラスを外してBクラス生徒を見た

すると

『おい、動かせねえぞ！』

『どうなってるんだ！』

Bクラス全員の召喚獣が動かなくなつた

「これが、俺の腕輪の能力『石化』だ

見た相手すべてを石にしてしまつ

だから、味方も石にしちまうから面倒なんだよな」

松也がそう言い、松也の召喚獣はサングラスをかけ直した

「明久、こいつ等はあと数分は動けない

その内に根本を討ち取れ！」

「分かった！」

Fクラス 吉井明久が根本君に数学で勝負を申し込む！

試獣召喚！
サモン

「ちくしょう！試獣召喚！」

その後、明久が根本を討ち取り、戦争は終結した

第十五話（後書き）

腕輪がとひとひきました！

このあとの応用などひこよひ……

第十六話（前書き）

Bクラス戦が終わりました

根本がひどい目にあつ予定です

第十六話

「……俺がDクラスに出した条件はなんだつたんだ」

「まあ、その、なんだ、すまん」

雄一はDクラスに出した条件が意味を為さなくなり落ち込み、松也は氣まずやうに謝った

「はあ、さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くかな、負け組代表？」

「……」

雄一の視線の先には、先ほどまでの強気だった根元が床に座り込んでいた

余程、明久に負けたのが響いているのだらう

「本来なら設備を明け渡して、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄一の発言に対し、Fクラスが騒ぎ始めた

「落ち着け、前にも言つたが、俺達の田標はAクラスだ
ここは通過点でしかないをだ」

「ああ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるひつと思つて
いる」

「……条件はなんだ？」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やつてくれたし、正直去年から田
がわりだつたんだ」

「ここで取引だ。Aクラスに行って試合戦争の準備が出来てると宣
言して来い

そりすれば今回は設備については見逃しても良

ただし、宣戦布告はするな。

すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備がある
とだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「ああ、それだけで『待て雄一』。今度はなんだ?」

「いい物があるから少しだけ待つててくれ」

そう言つと松也は教室から出て行つた

数分後、松也は何かが入った鞄を持ってやつてきた

「なんだそれは?」

「まあ見てろよ、さて、Bクラスの代表がコレを着て先程言つた通りの行動をしてくれたら、見逃してもいいぞ」

そう言つて松也は鞄からチャイナ服を取り出した

「おいおい、それどうしたんだ?」

「先輩から貰つてきたんだ、失敗作だから、使い終わつたら捨てでいいってよ」

「確かにこいつが着たのなんてだれも着たがらないだろ?」

「バ、バカな事を言つた! この俺が、そんなふざけた事を!」

『Bクラス生徒全員で、必ず実行をせよ!』

『任せろー。必ずやらせる!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はない!』

Bクラス面々はやる気満々だ

人望の無さがハッキリと分かるな…

「んじゃ、決定だな」

「くつー、よ、よんな変態

ドゴッ!

ぐふうっ!—!

『とつあえず、黙らせました』

「お、おつ。あらがとつ」

一瞬で代表を見限り腹部に拳を打ち込むBクラス男子生徒

あまりの変わり身の早さに、雄一もあっけにとられ、少し引いていた

「じゃあ、着付けに移るとするか。明久、手伝ってくれ」

「了解

松也と明久はぐつたりと倒れている根本に近づき、制服を脱がし始めた

「う、うう・・・・

うめき声を上げる根本

「おひいー.

バキッ！

「がふつー.

念のため起きないように追加攻撃をくわえておへ

見慣れた男子の制服を脱がし、チャイナ服をあてがう

「うーん・・・これどうするんだ？」

「さあな、俺も知らんしな……」

『私がやつてあげようか?』

Cクラスの女子の一人がそう提案してきた

「いいのか?悪いな。じゃあ、せつかだし可愛くしてあげてくれよ

『それは無理。十台が腐ってるから』

「じゃ、よひぐ

松也達は女子に任せてその場を後にした

「ねえ松也、この制服どうする?」

「俺に任せてくれ、いい考えがある」

明久から制服を受け取った松也は怖い笑みを浮かべていた

「ハ、この服やけに短いぞ」

ある用事をすませて、教室に向かっていると根本の声が聞こえたのでそちらを向いたが失敗だった

田をふわわたくなるほど気持ちの悪い姿になつておつ、吐き気がした

『いいからキリキリ歩けー』

『そ、坂本と鈴風ーよくも俺こことなことを……』

『無駄口をたたくなーこれから撮影会もあるからな、時間がないんだべー』

『あ、聞いてないぞー』

「よつ根本、随分気持ち悪い姿になつたな」

松也は吐き気を抑えながら根本達に話しかけた

「鈴風！-テメハよへも…」

『どうしたんだ鈴風？』

「いやな、撮影会が終わったら根本をここに連れてつてくれ

松也はそう言い一枚のメモを渡した

『分かった。それだけか？』

「後もう一つある、ちょっと耳貸せ」

『?』

Bクラスの一人を呼び、小声で話し始めた

「いいが、根本を案内したら、すぐに逃げる

……死にたくなかつたらな

『おいおい、何があるんだよ』

Bクラス生徒は笑い出しだが

「……がいる

ビクッ！

ブルブルツ

ある人物の名をいふと震え始めた

「いいな」

『……分かつた。他のヤツに言つとくへ

「頼んだぞ」

言い終わると松也は教室に向かつた

「あ、松也、何処に行つてたの？」

「野暮用さ、それより瑞希に明久、帰るか」

「そうだね」

「はい

こうして松也達は帰つて行つた

（余談）

「本当にここに制服があるのか？」

根本は撮影会が終わり、制服を取りに旧校舎のとある教室に来ていた

『さつさと入れ』

「分かったよ…」

根本は教室に入つていった

『よし、逃げるぞー。』

『ああ、そうだな！』

根本を連れてきたBクラス生徒達は急いでその場を後にした

（ちくしょう！俺に恥をかかせやがつて！）

おかげで友香とは別れるはめになってしまった

（びつ復讐してやうつか…）

ガチャ

「？」

そんなことを考えてくると鍵の閉まる音が聴こえ振づ向くと

そこには

「あなたがそうなのね？」

船越先生がそこにいた

「な、なぜここに…」

「鈴風君から告白したい生徒がいるからここに待つよ」と言わ
れたのよ」

「あこつなんて事を…」

「わあ、驚いてしまって」

「い、いやだ！ 来るな…」

「あやああ~~~~~！」

この日を境に根本は女装癖と熟女好きといつ噂がたつたのは言つま
でもない

第十六話（後書き）

船越先生に喰われた根本

じつして、学園（特に男子）の平和は守られた

次回からいよいよAクラス戦！

第十七話（前書き）

いよいよAクラス戦へ

第十七話

「一騎打ち?」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

補給試験も終えた翌日、松也達はAクラスに宣戦布告に来ていた
その前にAクラス代表の霧島翔子と雄一が幼なじみであることが判明し、一騒動あつたのは別の話、

「うーん、なにが狙いなの?」

「もちろんFクラスの勝利が狙いだね」

秀吉の双子の姉である、木下優子が交渉にてていた

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね

だからと言つてわざわざコスクを冒す必要もないかな

「賢明だな

といひでBクラスとやつあつ氣はあるのか?」

「Bクラスって

……昨日のあの……」

昨日の根本の格好を思い出し顔を青ざめる優子

後ろを見るとAクラスの何人かは吐きそうになっていた

「そうだ。幸い宣戦布告してないみたいだが、どうなることやら」「ひ

「ちなみにBクラスとは『和平交渉にて終結』って形になってるからな

「あと、BクラスだけじゃなくDクラスもだからね

「……それって脅迫じゃない?」

「いや、ただの忠告だ」

「うーん……わかったわ。なにを企んでいるかは知らないけど、代表同士の一騎打ちだけでなく、一騎打ち五回で三回勝つた方の勝ち、ていうのなら受けてもいいわ

「でも、じぶんからも提案

代表同士の一騎打ちだけでなく、一騎打ち五回で三回勝つた方の勝ち、ていうのなら受けてもいいわ

「姫路がでる可能性の警戒か？」

「やうひよ」

「その条件を呑んでもいい」

「ホント?」

「その代わり、勝負の内容はこちらで決めさせてもいい」

「え? うへん……」

「……受けてもいい」

「つおつー?」

いきなり目の前に日本人形のよつな少女、霧島翔子が現れた

「……雄一の提案を受けてもいい」

「あれ? 代表、いいの?」

「……そのかわり、条件がある」

「なんだ？」

「……負けた方はなんでも一つ『ハリ』とを聞く」

「わかった。交渉成立だ」

「えー？ いいのー？」

「おい雄一、本当に大丈夫なのか？」

さすがに心配になり、松也が雄一に話しかけた

「なに、心配するな」

が雄一は余裕だとばかりに言った

「……勝負はいつ？」

「今日の午後からでいいか？」

「……わかった」

「じゃ、教室に戻るぞ」

交渉成立したので、みんなは教室へと戻つていった

（余談）

Fクラスメンバーが帰った後のAクラス教室での会話

「ね、ねえ、翔子……」

「……なに？」

翔子に話しかけた女子生徒は驚きの表情を浮かべていた

「雄一くんの左側にいた男の子の名前って分かる?」

「?……吉井のこと?」

ちなみにさつきの立ち位置は雄一を先頭に左が明久、右が松也という形である

「吉井くんっていうんだ……」

女子生徒は何かを想つように遠い目をした

その頬は少しだけ紅く染まっている

翔子は訳が分からずに首を傾げていた

第十七話（後書き）

果たしてこの女子は！？

第十八話（前書き）

洲鳴さん、感想ありがとうございました！

第十八話

「それでは一回戦の生徒は前にでて下さい」

午後からAクラス戦が開始され

今から一回戦が始まろうとしていた

ちなみに一回戦は優子対秀吉で行われ、秀吉も必死に応戦していたが

結果は優子の勝利として終わった

「僕が行くよ」

明久は立ち上がり、前へと歩いていった

Aクラスを見るとビューティフル女子のようだ

肩までかかるぐらいのウェーブのかかった金髪に青い瞳、白い肌と
相まって、

まるで、フランス人形を思わせる姿だった

「あれ? キミって、確かあの時の?」

「はい、あの時はありがとうございました」

「ん? 明久、知り合いか?」

「うん、ほら、この前話した…」

「アホキ~」

ビクッ

ちなみに人質の一件の後に明久達は名前で呼び合つようになつたみたいだ

「え! なに、美波怖いよ~」

「あの子は誰よ~」

「誰つて、この前、病院まで連れてつた子だけだ?」

「ああ、あの振り分け試験の日に助けた子か?」

「うん、元気そ�で良かったね。えーと……」

「まだ名乗つていませんでしたね

私は薄野月美です

「僕は吉井明久つていうんだ。よろしくね、薄野さん」

「はい、よろしくお願ひします

仲良く一人で自己紹介をしていたが

『なによアキは…』

『ちくしょつ、吉井のくせに…』

『あの異端者が…!』

『…………裏切り者に死を!』

その後ろでは美波とFFF団+ムツツリーーから黒いオーラがでていた

「月美か？久し振りだな」

「うん、雄一くん久し振り」

そんななか雄一は月美に話しかけていた

「雄一、薄野さんのこと知ってるの？」

「ああ、翔子の従姉妹だ」

『総員、構え！』

雄一の言葉に先程の教室のようにみんなが一斉に構えた

だが、今回は上履きではなく

カツターであった

「待て！そんなもん投げようとするなー！」

『黙れ！』

『霧島さんに続き、薄野さんとも知り合ひだとー。』

『…………覚悟しろー。』

『「ひやましいんだよーチキシコウー。』

あちこちから怒鳴が飛び交う

力チャ

ギロッ！

「いいから黙れ！！」

『『『『すみませんでした～～～！！！』』』』

見かねた松也がにらみつけ、FFF団を黙らせた

「やうやく、よひじいでしょうか？」

「あ、すみません。待たせてしまつて

「科田は何にしますか？」

「英語でお願いします」

科目指定はAクラスが行つた

ちなみに先程の一回戦は秀吉が指定した

「では、さじめて下せこ」

「試験召喚…！」

いつて、一回戦が始まった

第十八話（後書き）

ついに少女が登場、果たして今後の展開は！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8304x/>

バカと色付き眼鏡と召喚獣

2011年12月1日22時49分発行